■論文題目	演劇の稽古場におけるコミュニケーションの在り方		
■氏名(学籍番号)	長尾梨奈(0412020070)		
■指導教員	平井勇介	■所属コース	地域社会・環境コース
■キーワード	アマチュア演劇	教育	共同作業

1. はじめに

日本の社会は、年齢や肩書、学歴といったステータスによる上下関係が強い風潮がある。学校の部活内での先輩後輩の関係や、会社内での上司と部下の関係においてそれは見られる。一つでも年齢や歴が上の相手なら敬語で話し、尊重するという人は決して少なくない。年功序列や終身雇用もその延長線上に存在する慣習である。特に高校までの学校教育においては、学校が定めた校則や教師の言うことに従うべきだという雰囲気も手伝って、自己形成の段階から日本人の意識に強く根付いていると考えられる。

一方で、上下関係を意識して他者の意見を受け入れているだけでは成立しない場も存在する。筆者はアマチュア演劇の座組に呼ばれ、稽古場に参加したことがある。そのとき筆者は自分の意見よりも、周囲の経験豊富な演劇人の意見を優先することが多く、当時の演出家から「もっと自我を出していい」という言葉をもらったことは強く印象に残っている。アマチュア演劇の稽古場には今まで感じてきた上下関係が当てはまらず、稽古場に適したコミュニケーションの取り方があるのだと気が付いた。この場には、従来の日本の教育からは得難い他者とのコミュニケーションへのヒントがあるのではないだろうか。近年、演劇の専門家によるワークショップやドラマ教育など、演劇的手法を用いた実践による教育的効果が注目を集めている(内藤、2018、小林、2010、渡辺、2011 など)。数ある演劇活動から、本研究では「上映を前提としたアマチュア演劇の稽古場」に対象を絞り調査を行う。稽古場の参与観察やインタビュー調査を通じ、そこでのコミュニケーションの在り方を検討し明らかにすることで、今後の他者との対話や教育について見直すための手がかりが得られることを期待している。

2. 調査概要

2-1. ライナー・ノーツについて

対象となる団体「ライナー・ノーツ」は、2019 年 5 月に旗揚げした演劇プロデュースユニットであり、盛岡を中心に活動している。正規メンバーは現在 5 名。ライナー・ノーツの特徴として、「劇団」ではなく「演劇プロデュースユニット」と自らを称している点が挙げられる。公演を行う際、ライナー・ノーツに所属しているメンバーに加え、他の劇団に所属している人やフリーの人を集め座組を組んでいることが劇団との違いであると主宰は述べている。そのため、座組のメンバーはスタッフ含め公演ごとに変化する。

2-2. 調査方法と対象者

本研究では、ライナー・ノーツ第 4 回公演「だからあやふやな窓で」の座組 17 名を対象に、参与観察とインタビュー調査を実施した。参与観察は顔合わせを行った 6 月 20 日(火)から、公演本番日である 8 月 26(土)・27(日)までの稽古期間中に 7 回行った。また、インタビュー調査は 10 月 20 日(金)から 11 月 4 日(土)にかけて、座組から 8 名を対象に行った。内 7 名はオンラインツール、1 名は対面形式で各回 1～2 時間の聞き取りを個別で実施した。

3. 調査のデータ

3-1. 参与観察から

稽古では役者が脚本に書いてあるセリフや指示に合わせ、自らの生み出した解釈を演技として表現する。それを見ながら演出家はキャラクターの設定や自らの解釈と矛盾しないか確認し、より良い演技になるよう稽古の参加者と共に修正作業を行っていく。そういった表現する・観る・修正するの繰り返しで稽古は進んでいく。演出家は稽古場を先導する力の強い役職ではあるが、今回の参与観察では役者の演技や発想によっ

て演出を変更したり、役者の解釈を引き出したりといった場面が見られ、役者が指示を出す→役者が応えるといった一方通行の関係ではないことが明らかになった。

3-2. インタビュー調査から

インタビュー調査の対象者は学生時代から演劇の活動に触れてきた人がほとんどで、長い人では10年以上携わっている。「演劇をしていて良かった点」については、「コミュニティが増える」、「仕事では関われないような人との絡みが増える」という意見が多く出ていた。演劇が自分に与えた影響については、「人前に出ることの躊躇がなくなった」「劇中の人同士の関わりを通して疑似的に自分のコミュニケーション能力が上がった」など、日常生活で人と関わる際のハードルが下がったといった意見が挙げられた。また、「役の人生を追体験できることで経験や感性を獲得できる」という意見、その一方で「自分の人生の練習、経験値になってる。大きな壁とかがあっても演劇で活かせるかもって思う。演劇からもらってることもあるし。人生の感覚の共有をしている」という意見が挙げられた。「良い稽古場とはどのような場だと思うか」の質問には、「稽古の参加者全員が委縮することなく、意見を言える場」という意見が多数であった。「そのような良い稽古場を作るために必要な要素は何か」と聞くと、「意見を否定されない雰囲気」「積極的に正面切って意見を出してくれる人が数人いると出しやすい」などの意見が出された。参与観察でたびたび見られた「演出家から役者相手に、脚本や登場人物に関する解釈を聞き出すやり方」を行うのはなぜかと角舘さんに聞くと、「自分の脳みそを超えるものが欲しいから、今はこういう形をとっている。言われてやったことより、考えて出したものの方が表現として強い」と回答が得られた。

4. 考察

アマチュア演劇の稽古場では、それぞれの立場から想像力を発揮し導き出せる「より良いもの」を提案し、相手はそれを受け取る、そして擦り合わせて修正するという対等なキャッチボールが永遠と繰り返されている。稽古が始まった瞬間から、本番公演が終わるその時までこの双方向のやりとりに終わりは存在しない。「観客に観せるための最も良い舞台」という曖昧で不安定な概念を、座組のメンバーは共通認識として常に抱いたまま稽古をしている。この曖昧な概念を舞台上に構築するために全力で意見をぶつけ合うのである。これはアマチュア演劇の稽古場で見られる特有のコミュニケーションであり、高度な次元のやりとりが展開されている場であると考えられる。

今回の稽古場で演出家の角舘さんは、一貫して稽古の参加者に解釈や意見を求め、対等な議論を交わす姿勢をとっていた。稽古場では常に想像力を働かせて、良いと思う意見は遠慮することなく表現すること、「脚本を超える」発想が常に求められている。 今回の調査でその意識が徹底して稽古場全体に浸透している、丁寧な場づくりを見ることができた。このような稽古場の空気には「考えることを放棄させない」力がある。アマチュア演劇の稽古場で見られた徹底した意識づくりは、稽古場に限らず人間性を高める場づくりの手がかりになるのではないだろうか。

主な参考文献

1. 内藤三和子ほか「平田オリザワークショップにおけるコミュニケーション教育の可能性：対話劇の制作過程と参加者の意識に関する考察」佐賀教育大学実践研究、2018、第36号、42-62頁
2. 小林由利子「英米のドラマ教育の考察(1)-ジョナサン・ニーランズの「コンベンション・アプローチ」の検討を通して-」東京都市大学人間科学部門、2010、19-32頁
3. 渡辺貴裕「ドラマによる物語体験を通しての学習への国語教育学的考察」国語科教育、2011、70巻、100-107頁